

【目的】 現在の学校教育では、子どもが手を使う内容が多く見られる。そこで、子どもたちの日常生活や学校生活の中における教師の「手の働き」の重要性に対する認識、また、幼稚園、小学校、中学校、高等学校教育へと教える対象年齢の違いによる認識の変化などについて、質問紙調査法により明らかにした。本報では教師の年齢による特性について検討した。

【方法】 調査対象者は広島県、岡山県内の幼稚園、小学校および、中学校の技術・家庭科、高等学校の家庭科を担当する教師2366名とした。調査は1994年10月から11月に実施し、回収率は47.9%であった。調査内容は教師の属性、教師の子ども時代の生活経験、子どもたちの行動把握、教師の生活技術観、子どもの手の共働性と日常生活・学習態度との関連、教育上必要な生活技術、手仕事観の各領域を設定した。なお、教育上必要な生活技術を①暮らしていくため、②情緒の安定のため、③身体の発達のため、④暮らしの潤いのための4タイプとし、分析を行った。

【結果】 1. 教師の年齢は35～40歳を頂点とする正規分布を示していた。また、経験年数は15～20年が多かった。2. 教師の年齢に正比例して子どもの行動に関する問題意識は強くなっていた。3. 生活技術は年齢に関係なく必要度の高い回答が得られたものと、年齢に比例したもの、年齢に逆比例したものがあつた。4. 教育上必要な生活技術の必要度は①>④>②>③の順であり、それぞれのタイプに特徴的な回答が得られた。特に、②は飼育、栽培、食事マナー、刺繍・編み物などとの関連を認めたものが多かった。